

介護老人保健施設「しょうわ」におけるデイケアやショートステイサービスを通じた 在宅介護支援のとりくみ

研究分担者 森山葉子 国立保健医療科学院 主任研究官

研究要旨

介護老人保健施設が入所施設としての役割のみならず、発想の転換、サービス内容や提供方法の工夫をすることで、在宅介護支援を行っている取り組みを紹介する。デイケアの利用者を中心に、ショートステイや入所をそのバックアップ体制としてとらえ、在宅介護者が離職することなく在宅での介護を継続できることを目標に、100%緊急ショートステイを受け入れる工夫をしたり、早朝デイケア（朝食付き）や延長デイケア（夕食付き）等のサービスを提供している。こうした施設の先駆的事例を紹介することで、施設における家族介護者支援の新たな考え方を示す。

A. 研究目的

介護老人保健施設しょうわ（埼玉県春日部市）では、入所施設としての役割のみならず、発想の転換、サービス内容や提供方法の工夫をすることで、在宅介護支援に力を入れている。デイケアの利用者を中心に、ショートステイや入所をそのバックアップ体制としてとらえ、在宅介護者が離職することなく在宅での介護を継続できることを目標に、100%緊急ショートステイを受け入れる工夫をしたり、早朝デイケア（朝食付き）や延長デイケア（夕食付き）等のサービスを提供している。こうした施設の先駆的事例を紹介することで、施設における家族介護者支援の新たな考え方を示す。

B. 研究方法

介護老人保健施設しょうわを訪問し、施設長佐藤龍司氏に当施設の在宅介護支援に関する取り組みについてインタビューを行った。

（倫理面への配慮）

個人を特定できる情報は入手しておらず、報告書に掲載も行わないため倫理面の問題

なし。

C. 研究結果

当施設は、「家で死ぬ」の理念のもと、老健施設の特徴でもある在宅介護支援に力を入れている。どのように死ぬかということは、いかにその人らしく生きるかということと同義であるとして、ただ延命するだけの医療、処置をするのではなく、その人のその状況に必要な医療、支援を行うこと、それはどういうものであるかを、サービス利用者やその家族と常日頃話し合っており、医療者と利用者や家族との間で確固たる信頼関係が築かれている。施設長による利用者の診察中も、利用者本人の話だけでなく、家族の話を主に聞いたり、施設スタッフとの関わりの中で、家族介護者が理解をされているという実感をもってもらうことを重視している。

当施設は、老健施設ではあるが、入所そのものはデイケアやショートステイを支えるためのものとして、デイケアを中心にその他サービスを組み立てている。デイケア

の利用者達の必要に応じてショートステイサービスを提供し、必要に迫られれば一時入所をするが、入院等を経たとしても、また自宅に戻れるよう体調を整え、在宅復帰すればまたデイケアやショートステイの利用で在宅介護を再開する。この好循環をまわすことが、在宅介護者支援を第一に考えた老健の役割であるとしている。

就業しながら介護をする人が増え、これら家族介護者たちが離職せずに介護を継続するためにはどのようなサービスが必要か、そのサービスをどのように工夫すべきかを常に考え、利用者や家族にあったサービスを提供している。例えば、平日はデイケアのみで土日にショートステイを希望する家族もいれば、その逆の方が都合のよい家族もあり、こうした希望に沿ってサービス利用を提供している。

また、平日にデイケアを利用する場合、一般的なデイケアの開始・終了時間では、働く家族の出勤や帰宅に間に合わないことが多い。そこで、当施設では、朝食付きの早朝デイケアや、夕食付きの延長デイケアを実施することで、こうした家族介護者のニーズにこたえている。

デイケア等で高齢者が体調不良になった場合も、帰宅を促すのではなく、医療者の管理のもとショートステイで様子を見ることを提案する。こうした考えから、緊急ショートステイとなることもあるが、100%受け入れる工夫を行っている。ショートステイと入所を合わせて124のベッドがあり、このうち半数以上はショートステイサービスの利用であり、他老健施設よりその割合が高い。それでも空きがない場合は、調子のよい高齢者に帰宅してもらうこともあるという。日ごろから信頼関係ができていたので、みなお互い様と納得して了承するとのことであった。

こうした、実際のサービス内容や、利用者や家族との関わりの中で、在宅介護に必

須である家族介護者の土台を支えることで、介護していこうと思える環境作りに寄与している。

D. 考察

老健はその分類上も施設であることから、入所をする場としてとらえがちであるが、家族介護者の支援をするためにはという発想の転換や、サービス内容や提供方法の工夫により、大人数の在宅介護支援をすることができることが示された。デイケア利用者を中心とし、これら利用者やその家族を支援するために、ショートステイや入所のバックアップ体制を整備するという発想の転換により、家族介護支援が可能となっていた。

そこには何よりもまず、施設長をはじめとした施設スタッフと利用者や家族の間に確固とした信頼関係が築かれていること、そのうえで個々の利用者や家族のニーズをくみ取り、一方で施設側の状況も理解してもらい、双方にとってベストとなるよう、臨機応変に支援を行い、協力してもらっていた。

施設に高齢者を入所させている家族も、心のどこかではできることなら自分で介護をしたいが、仕事や育児やその他さまざまな理由によりやむを得ず入所を選択している人も少なからずいるだろう。そういう人たちにとって、当施設のような、何かあれば緊急でもショートステイができる、必要に迫られれば入所もできるといったバックアップ体制を持つ施設があれば、施設入所という形ではなく在宅介護を選択肢とし得る可能性もある。今後、こうした形の施設を増やしていくことも介護者支援の政策として考えるのではないだろうか。

E. 結論

老健といった「施設」の形態であっても、家族介護支援をするという目標から、発想

の転換や、サービス内容およびその提供方法の工夫により、家族介護を支援することができることが示された。今後ますます在宅介護が推進される中で、家族介護者にとっては、何かあれば助けてもらえるという安心感が最も必要なことであろう。施設と利用者や家族の間に確固たる信頼関係を築いた上で、必要な支援を提供し、あるいは必要な協力を仰ぐという形で、適切なバックアップ体制を提供できる当施設の取り組みは、今後の家族介護者支援の一つとして大きな役割を果たすと考えられる。

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし